

新潟市水族館の管理に関する基本協定に係る

令和 6 年度 業務報告書

1. 入館状況について

令和 6 年度総入館者数 555,093 人(対前年度比 102.2%)

指定管理者として引き続き選定され、令和 6 年度からの 5 年間の指定管理期間における 1 年目の管理運営を行った。これまで同様、充実した施設を活用し、豊富な経験・知識・技術を持った職員による適切な管理運営に心掛け、お客様の安全・安心を第一に考え、満足度向上に努めた。

入館者の状況については、ゴールデンウィークは令和 5 年度より少なかったものの、夏休み期間は令和 5 年度を上回り、帰省や行楽で県外から来館されるお客様などで館内が賑やかとなった。秋期は天候も安定しお客様にとって来館しやすい好条件となった。冬期、新潟市中央区の降雪量は平年並みであったが、2 月 7 日に新潟市に「顕著な大雪に関する気象情報」が発令され、3 時間降雪量が観測史上最大を記録した。水族館周辺でも夜間に 50 センチを超える積雪量となったことから翌日の開館が危ぶまれたが、除雪などの対応を十分に行い、通常開館することができた。

最終的な入館者数は 555,093 人、対前年度比 102.2%となった。令和 5 年度を大きく上回り、リニューアル直後の平成 25 年度、平成 26 年度に次ぐ 3 番目の入館者数となり、「公の施設目標管理型評価書」の評価指標である「入館者数 54 万人以上」を達成することができた。

また、年間パスポートは 15,723 人のお客様から購入いただき、同評価指標の「14,000 人以上」を上回った。3 年連続で 15,000 人を超え、積極的な宣伝やキャンペーンの実施、さらに口コミによる効果が現れているものと推測される。パスポート所持者の平均年間来館回数が 1 人あたり 5.7 回であることから、パスポート購入者の増が入館者数の増に結びつくものと今後も販売促進に努める。また、令和 4 年 12 月の開始から 3 年目を迎えたデジタル版年間パスポートは、普及率が 37.6%まで上がっている。カード型からデジタル版への移行は、お客様の利便性の向上に加え、発行に係る手続きの簡素化や経費の削減にも繋がるため、普及率をさらに上げていきたい。

申請や手帳による入館料の減免による入館者数は、「身体障がい者等手帳」「小・中学校」などの区分で前年度を上回り、減免入館者総数は 23,550 人、対前年度比 101.0%となった。総入館者数に占める割合は 4.2%であり、館の果たすべき社会的役割は依然として大きいものと考えている。

今後も、常におもてなしの心を持ち、「行ってみたい」「来てよかった、また来たい」と感じてもらえるようなサービスの提供を心掛け、新たなお客様の獲得とリピーターの確保に努めたい。

2. 施設の管理運営状況について

(1) 開館時間の変更及び臨時開館・閉館

開館時間の変更及び臨時開館・閉館については、新潟市水族館条例に基づき適切に実施した。

繁忙期における開館時刻の繰り上げは 60 分繰り上げ 8 時開館を、ゴールデンウィークの 5 月 3 日(金・祝)～5 日(日・祝)の間、7 月 14 日(日)、15 日(月・祝)及びお盆期間の 11 日(日・祝)～16 日(金)に実施した。これにより、朝早くの来館を希望されるお客様へのサービスの提供とともに、券売窓口での待機列の発生による混雑や館内の密を緩和し、時間帯ごとの入館者数の平準化や周辺道路の混雑緩和を効果的に行うことができた。

正月の 1 月 2 日(水)・3 日(木)は、例年どおり臨時開館を実施した。みなとトンネルからの人の流れも多く、

当館の周辺道路は、護国神社の初詣客で、三が日は朝早い時間から混み合う。初詣帰りと思われる来館者も一定数(2 日間で 4,792 人)あり、正月の臨時開館は定着しているため今後も実施していきたい。

電気事業法第 42 条に基づく電気設備法定点検を行うため、例年どおり 3 月第 1 木曜日とその翌日である 3 月 6 日(木)・7 日(金)を臨時休館した。それ以外の点検や工事については、開館時間内も含めお客様の妨げとならないよう工夫しながら行った。

今後も開館時間の変更等については、お客様の入館動向を把握し、適切に実施して、費用対効果を図りながらサービスの維持向上に努めていきたい。

(2) 展示生物について

基本協定書の指定管理者業務仕様書に謳われている約 600 種、2 万点の魚類、海獣その他水生生物の飼育展示規模の維持と、展示内容の魅力の向上に努めた。

魚類輸送専用車両を積極的に運用して生物交換や採集活動を行い、展示コンセプトに沿った沿岸性魚類や深海性魚類、温帯・亜熱帯性魚類等を入手した。

特に深海性生物の収集、展示については、新潟県内各地の漁業協同組合の協力を得て行うことができた。トゲビクニン、イサゴビクニン、ヤマトコブシカジカ、クロゲンゲ等の魚類の他、ベニズワイガニやボウズイカなどの無脊椎動物、また日本海固有種である両津湾産サラサベッコウタマガイを展示した。自家採集では本県初記録となるサツキハゼを採集した。これは本種の北限記録となり、現在も本個体は育成室にて展示中である。

また、研究成果を還元する1つとして、飼育下で繁殖した生物の展示も積極的に行った。アカムツ(通称＝ノドグロ)は人工育成技術開発を継続し、育成個体を本館地下の「暖流の旅」ゾーンの水槽に群れで常設展示している。絶滅が危惧される日本固有種であるホトケドジョウ、シナイモツゴ、キタノアカヒレタビラ、キタノメダカを「信濃川水槽」で展示した。また育成室では、8 月上旬に佐渡で採取したアカテガニから得られた孵化個体を育成し、稚ガニとなった 7 個体を展示した。この他チャガラ、アシナガモエビ、ユビナガスジビ、ヌカエビを繁殖させ展示した。

令和 5 年度に引き続き、ウミガラスの繁殖に成功した。令和 6 年度は令和 5 年度の反省から岩棚を改良したことが功を奏し、繁殖ペアによる抱卵・育雛の様子を来館者に見ていただけた。5 月 25 日産卵、6 月 27 日孵化、7 月 23 日巣立ちと、孵化したヒナは無事成長し、現在も展示している。令和元年より 4 年連続で繁殖に成功したカマイルカは、現在も母仔ともに良好な状態を維持している。またフンボルトペンギンは、巣を持てないペアの解消を目的に、キッズファン近くに繁殖エリアを新設した。来館者にはパネルにてタイムリーな状況をお知らせし、今まで観察できなかった抱卵育雛中のペアを観察いただけるようになった。

春から秋は「にいがたフィールド」で「にいがたフィールドガイド」を 6 回実施し、季節ごとの観察ポイントや自然繁殖したシナイモツゴ、キタノメダカなどの紹介を行った。また企画展示「ROV で迫る日本海の深海」では日本海初記録となったコクラゲの生体を展示し、開催期間中に「企画展示ガイドツアー」を実施し、展示生物の観察ポイントなど詳しい内容を紹介した。

令和 6 年度はヤリマンボウの漂着が相次ぎ、状態の良い個体も多かったため、生鮮展示を 12 月 17 日から 22 日と 1 月 11 日から 13 日の 2 回行った。また 1 月 15 日には 2 回目に展示した個体の解剖を公開で行い、多くの来館者にヤリマンボウの形態を中心に食性や生態について紹介した。

今後とも、開館以来の管理運営により蓄積してきた豊富な知見に基づき、創意工夫を重ね、展示生物の充実や、入館者に対する正確かつタイムリーな情報提供に努めていきたい。また、常に新鮮味のある展示を心掛け、リピーターにも十分満足してもらえるような魅力あふれる展示を行っていきたい。

なお、高病原性鳥インフルエンザへの対策については、今シーズンも昨シーズン同様に流行が見られたが、当館のマニュアルに基づき防鳥ネットの設置を行った。今後も渡り鳥が飛来する時期は様々な方向から情報を

集め、状況を見ながら早めの対応・対策を行い、来館者、職員、飼育生物を鳥インフルエンザから守ることを最優先に被害の防止に努めたい。

(3) 通年事業の実施状況について

① ペンギン解説(所要時間約 10 分)

ペンギン海岸にてペンギンが泳ぐ姿や歩く様子等を見ながら、分類や形態、生態、生息地の環境、フンボルトペンギンが絶滅に瀕している背景、水族館における域外保全活動・繁殖の実施等について解説している。令和 6 年度から解説するスタッフを増員し、各自が少しずつ違う情報を発信することでピーターにも楽しんでいただけるよう改善した。

実施時間 11:30 13:30

② イルカショー(所要時間約 15 分)

様々な行動をみせながら、イルカの生態や環境との関わり、飼育下の健康管理、トレーニングなどを解説し、来館者の水生野生生物への理解を促し、環境保全への関心を高めてもらうことを目的としている。1 回あたり 15 分の中でイルカの種類、体の特徴、認知、運動能力などをイルカの動きとともに解説し、より楽しみながら自然に学べる構成としている。令和元年から 4 年連続繁殖した仔イルカたちの成長に合わせ、仔イルカがショーに出る機会を増やし、きびきびとした動きや仔イルカの紹介を入れることで、何度見ても飽きない工夫をしている。

なお冬期のイルカショーは、仔イルカが成長したことで安全に開催できると判断し 5 年ぶりに屋内プールで実施した。屋内プールでの開催は 1 月 14 日から 2 月 28 日の平日限定とし、多客が見込まれる土日は屋外プールで行った。イルカやスタッフと距離が近い屋内ならではの施設構造を生かし、出産直前の母イルカの体型や仔イルカの誕生直後の様子をパネルで紹介し、現在と見比べていただいた。来館者の反応はよく、また毎月実施しているアンケート調査でも、概ね高評価をいただいている。

実施時間 平日 11:00 12:30 14:00 15:30

日・祝日 10:30 11:30 13:00 14:00 15:30

③ マリンサファリ給餌解説(所要時間約 10 分)

これまでドを中心に給餌解説を行ってきたが、生物の状態にあわせド、ゴマフアザラシ、カリフォルニアアシカのいずれかの解説を行うこととした。アシカ科とアザラシ科の特徴や形態的・行動的な違いなどを紹介しながら生物を見比べてもらうことができ、鰭脚類についての来館者の理解につながったと考える。

実施時間 平日 10:30 14:30

日・祝日 11:00 14:30

④ 日本海大水槽解説(所要時間約 15 分)

展示生物の紹介から水族館のしくみまで多面的な情報を伝えるプログラムとして、日本海大水槽前で解説を行っている。解説の内容はその時々展示生物に合わせて行い、新規生物が展示されたり、繁殖行動が見られる時などは、それらを積極的に紹介している。解説の後には質問を受け付ける時間を設け、参加者の知りたいことに答えるように努めている。生物の生態や飼育設備などに理解を深めてもらう良い機会となっている。

実施時間 平日 13:45

日・祝日 10:00 13:45

⑤ 磯のいきもの解説(所要時間約 15 分)

磯の体験水槽で、生物を 1 日 1 回、解説を交えながら間近で観察してもらう構成としている。解説では、透明プラケースに対象の生物を入れ、体のつくりが観察しやすいように工夫している。対話を多く取り入れ、疑問、質問にも丁寧に回答するなど、参加者に興味を持って生物に接してもらえるよう心掛けている。来館者と直接対話するプログラム構成は、生物を観察する時の扱い方、生息環境や環境保護への理解を深めてもらうために有効であると実感している。

実施時間 平日 10:30

日・祝日 15:15

⑥ アクアラボ体験(所要時間約 15 分)

大型液晶モニターを用いて、生体や標本の観察、解説を行うとともに、ハンズオンも取り入れたプログラムとして行っている。哺乳動物から無脊椎動物まで幅広い生きものをテーマに日替わりで実施することで、水生生物に対する知識と理解を深めてもらう良い機会となっている。随時新しいプログラムを考案・実施し、水生生物の知識普及を積極的に行った。

実施時間 平日 13:00

日・祝日 12:30

(4) 生物展示関係イベント等の実施状況について

① マリンピアカレッジ

ア. グラスアクアリウム

有限会社エイチソーの早坂誠氏を講師として招き、小さなグラスに流木や石、水生植物を配置する「グラスアクアリウム作り体験」を実施した。グラスアクアリウムの作成を通じて、生態系の基本原則を理解し、維持管理をすることで生命に対する観察力・責任感を育むことを目指した。応募が多く、講師の承諾を得て定員を超過した状態での実施となった。教材が多く技術も必要であったが、参加者の満足度が非常に高いイベントとなった。

イ. 海のスター！ヒトデの秘密

水産資源研究所の木暮陽一氏を講師として招き、ヒトデ類の分類と生態についてクイズを交えながらの講演会を実施した。新種命名の手順や学名の話、変わった名前などの紹介や、形や色彩、大きさ、目の位置や管足の働きなどについて図版を用いて説明いただいた。標本収集の様子動画や、捕食パターンやその実例、棘皮動物に顕著な再生能力、繁殖形態、寄生生物など様々な話題が提供された。講演後、生きたイトマキヒトデの観察と摂餌実験を行った。質

疑応答は活発で良好な雰囲気、アンケート結果でも 96%以上の方から面白かった以上の評価いただいた。楽しみながらヒトデについての知識を得る機会を提供することができた。

ウ. イルカの眼から見える世界

東海大学海洋学部教授・東海大学海洋科学博物館館長の村山司氏を講師として招き、イルカの眼の構造について、視力、視力検査、視軸などについて講演いただいた。視力に関する言葉の正確な意味や、具体的な計測の説明、ヒトとイルカを比べた解説や、行動実験方法をお話いただき、また行動実験をしている動画も見せていただいた。その後、グループに分かれてトレーニングによる行動形成ゲーム(シェイピングゲーム)を体験した。講演は、視覚についてだけでなく講師の経験談を含め多岐にわたり、鯨類について知ってもらう良い機会となった。アンケートの結果も全体的に高評価であった。

② 講演会「水族館職員が語る 深海調査と深海生物」

企画展示「ROV で迫る日本海の深海」の付帯事業として実施した。講師には当館の職員の他、ROV 調査を行っている ふくしま海洋科学館から山内信也氏、東海大学海洋科学博物館から山田一幸氏を招いた。講演の他、貴重な深海のサメ「ラブカ」の骨格標本を間近で観察する機会や、実際の ROV を起動させ操作しながらの解説時間を設け、深海生物だけでなく、水族館の活動内容、科学技術など様々な面から深海を学ぶ機会を提供できた。なお、多様な参加者に配慮し、手話通訳と要約筆記をつけることを試みた。

③ 企画展示

ア. ふるさと新潟の魚～県の推進ブランド・市の銘産品～

新潟県の推進ブランドであるアカムツとホッコクアカエビ、新潟市が全国に誇る銘産品に指定しているアカムツ、ホッコクアカエビ、サクラマス、ヤナギムシガレイ、アカアマダイを紹介する展示を行った。これら 5 種の生物を展示し、形態や生態などの生物学的情報のほか、水産物としての利用についても紹介した。新潟の誇る水産物の認知度向上と魅力を伝えることができた。会期終了後に、展示物の一部を活用し、地下の大水槽脇においてミニ展示を行った。なお、本企画展示は、新潟県の助成を得て実施した。

イ. ROV で迫る日本海の深海

当館とふくしま海洋科学館が共同で継続的に行っている佐渡海峡での ROV(遠隔操作型無人探査機)調査に焦点を当て、調査の内容や結果とともに「深海」について展示した。会場内は深海を体感できるよう壁や床を暗くし、解説は内照式とした。ROV 紹介のコーナーでは実物大の ROV 模型を設置し、カメラや照明を起動させて興味を引く設計にしたほか、調査風景の映像も展示した。ROV で撮影した映像は各水槽に種名板と並べて設置、またできるだけ多くの種の映像をスクリーンに投影して紹介した。生体展示水槽は、日本海初記録となったコクラゲや、海底環境を模した無脊椎動物を中心としつつ、当館が積極的に取り組んだアカムツ調査と、その周辺で見られる魚類も展示した。アカムツ水槽の横では、ROV で世界初記録となった野生のアカムツ映像と、それを見つけた時のスタッフの反応もあわせて展示した。また、生体展示水槽の他、海底ゴミの実物も実際の状態を模して水に沈めて展示し、多くの来場者の関心を集めていた。後半部は深海について解説するコーナーとして、深海の環境について、光、温度、圧力に分けて解説し、それぞれを視覚的に理解できるよう標本なども設置した。特に常温の水と超低温

の水を触り比べる展示は、多くの来場者の注目を集めた。深海の生物については、深海魚という定義があいまいであることや、どのように進化し、日本海の深海生物相がどうつくられたかを解説した。また、深海生物の液浸標本も展示した。会場内では、企画展示の内容をまとめ、当館の ROV 調査で観察された生物のほとんどを網羅したミニ図鑑を配布し、多くの方にお持ち帰りいただいた。

ウ. ミナミイワトビペンギンパネル展

10 月に開催したミナミイワトビペンギン解説と同時に本館地下日本海大水槽脇のスペースを活用し開催した。同解説は毎回人気であったため、パネル展を行うことで更にミナミイワトビペンギン知ってもらうきっかけとして実施した。壁に大きな写真や図など見やすいパネルの掲示することを心掛け、さらにミナミイワトビペンギンの等身大パネルを設置したことでより来館者が興味を持っていただいた。また、当初の開催予定は 3 月 15 日までであったが、「ペンギンの日」に合わせて 5 月 23 日まで延長した。

エ. にいがたの潟と水生生物 ※ラムサール条約湿地自治体認証関連事業

越後平野にある潟に焦点を当て、地域の水辺環境への関心と理解を深めてもらうことを目的に、新潟市にある潟、潟と人との関わり、ラムサール条約などについて解説パネルで紹介し、潟に生息する魚や甲殻類、貝類、爬虫類などの水生生物の生体展示と標本展示を行った。

オ. SNS フォトコンテスト受賞作品展

スマートフォンの普及により、撮影した写真のやりとりが容易になり、来館者が当館で撮影したものを SNS で発信する機会も多くなった。そこで、作品の投稿先の提供と当館の広告宣伝を目的に、SNS(X)上でのフォトコンテストを実施した。2 期に分けて開催し、それぞれ最優秀賞作品及び館長賞作品各 1 点を館内に展示した。夏期は 8 月 24 日～10 月 14 日で応募作品数 121 点、冬期は 11 月 23 日～2 月 24 日で応募作品数 174 点と、SNS 上での注目を集めることができた。

④ ナイトツアー

通常見ることのできない閉館後の夜の水槽の様子を観察してもらい、昼と夜での生き物の活動の違いや外観の変化等をツアーガイド形式で解説するプログラムとして毎年度実施している。令和 6 年度も 5 年度と同じく、金曜日と土曜日各 2 回、計 4 回実施した。とても人気のあるイベントで、応募倍率は、金曜日は令和 5 年度の約 15 倍から 25 倍、土曜日は 22 倍から 47 倍と特に土曜日の倍率が急激に増加した。これは SNS での広報の効果と考えられる。参加者のプログラムに対する満足度は、アンケートから「とても面白い」「面白い」の合計がほぼ 100%であり高い評価を得ている。これは回を重ねるごとにブラッシュアップしてきたことによるものであり、今後も開催していきたい。

⑤ イルカバックヤードミニガイド

10 月 12 日から 11 月 2 日までの毎週土曜日、計 4 日間、11 時 30 分から 12 時 15 分の 45 分間のプログラムで開催した。募集定員に対する平均応募率は 237%で、同イベントへの関心度の高さが伺えた。プログラム内容は、回を重ねながらブラッシュアップしてきたため、アンケートでは「おもしろかった」以上が 96%と高評価であった。ガイド終了後の参加者からの質問も多く、イルカに対する関心の高さが伺えた。イルカの眠り方などイルカに関する質問の他に、スタッフの一日のスケジュールが

知りたいなどの感想もあり、イルカや水族館の仕事についての興味と理解を参加者に深めてもらうことができた。次年度以降も継続して実施していきたい。

⑥ にいがたフィールドガイド

8月を除く4～10月の第3土曜日に計6回実施し、合計31組61人の参加があった。新潟市近郊の陸水環境や絶滅危惧種の生息域外保全についての解説を、写真パネルを用いて分かりやすく行った。また、にいがたフィールドで採集した魚類や水生植物をプラケースに入れ、観察しながら特徴を紹介した。雨天時はあずまや内で実施し、通常のガイドでは紹介しないハスの花托やヘビの抜け殻などに触れてもらいながら解説をした。さらに、観察できる動植物が季節によって異なるため、リーフレットを作成し、終了時に配布することで情報を補足した。ガイド終了後も水辺環境や生物について質問する方も多く見られ、自然環境への関心を高める機会を提供できた。

⑦ 企画展示「ROVで迫る日本海の深海」ガイドツアー

企画展示「ROVで迫る日本海の深海」の開催期間中、毎月第一土曜日の正午から、企画展示会場内を職員が解説しながら案内するプログラムを実施した。会場内の展示物だけでは伝えきれない、生物の観察のポイントや解説パネルの細かな内容などを補完する目的で行った。参加者からの質問も多く、積極的に話を聞く様子が見られた。ガイドツアーとして解説することでより深い学びを提供できた。

⑧ 記念日イベント

ア. ペンギンの日

4月25日が「世界ペンギンの日」と定められていることから、4月1日～5月18日まで、もっとペンギンを知ってもらうイベントを実施した。ミナミイワトビペンギン解説、パネル展「フンボルトペンギンの生息地を訪ねて」、特別解説、バックヤードツアーを開催した。いずれのイベントも令和5年度と内容を見直し、新たな情報の提供に努めた。パネル展は、当館職員が現地調査を行った記録を基にフンボルトペンギンの生態や野生での現状を伝え、パネル展示だけでは伝わりにくい部分を特別解説で補った。バックヤードツアーは、参加者の年齢層に合わせた内容とし、ファミリー向け、大人向けを設けた。ファミリー向けはこどもの集中が切れないように20分のショートコースとし、普段は見られない飼育の裏側を見てもらいながら飼育の工夫等を解説した。大人向けは40分のロングコースとし、バックヤードを見ることに加えペンギン解説にも挑戦してもらった。ペンギンの日のイベントの参加者は、合計で595人であった。今後も継続的に実施して、あまり知られていないペンギンの生態や形態、野生の状況などについて、ガイドツアーやパネル展示を通して楽しみながら知ってもらい、ペンギンをきっかけとして生物の生息環境に関心を持ち、さらに身近な自然環境に興味を持ってもらう機会としていきたい。

イ. カワウソの日

5月の最終水曜日が国際カワウソ生存基金により「世界カワウソの日」と定められていることから、直近の土曜と日曜である5月25・26日を中心に5月25日から6月30日までカワウソ類を知ってもらうイベントとして開催した。5月25・26日は、コアイベントとし、①カワウソ水槽前で特別解説、②アクアラボイベントとし毛皮触り体験、缶バッジ作製、フォトコーナーを設置した。①の特別解説は生き餌を与えながらカワウソ類の形態や生態、野生の状況などについて1日1回解説し、2日間で多くの方が参加した。また、②の毛皮触り体験ではカナダカワウソとラッコの毛皮に

実際に触れて、感触の違いを感じてもらったうえで毛皮を目的とした乱獲について解説した。5月25日から6月30日までは、アクアラボで解説パネルの展示を行った。カワウソ類は人間生活の影響を受けやすく、個体数が減少している種もいる。今後も継続的に実施して、カワウソ類の現状を知り、野生動物との共存について考えるきっかけにしたい。

⑨ いきもの教室

ア. 水族館の水

水生生物を飼育する上で欠かせない水を題材に、海水と淡水の違いや、水族館の水の利用方法を学ぶことを目的とした。水族館で扱う様々な水についてツアー形式で水族館の水がどこから来ているか見学し、海水と淡水の違いや、水の汚れなどを解説し、参加者に学んでもらった。プログラム終了後のアンケートでは、「濾過装置の仕組みが良くわかった」、「バックヤードを見てよかった」などの肯定的な意見が多く、水族館の水の利用や飼育設備について参加者に理解を深めてもらう機会となった。

イ. 水族館の獣医の仕事

水族館での獣医師の業務内容の解説、紹介を通じて、獣医師という職業の具体的な業務内容、社会的な役割を理解してもらうことを目的とした。スライド資料を用いたレクチャーでは、獣医師免許取得に必要な進学経路、国家試験、職域(臨床、公衆衛生、ほか)に触れた後、水族館で診療対象としている動物種、動物種ごとの病気、人と動物の共通の感染症を中心に紹介した。座学のレクチャー後、実技として、魚(メジナ)を用いた魚の麻酔および麻酔深度のモニタリング、自分の体を用いての聴診器や心電図による検査の体験を行った。また、資料として、海獣類の骨格標本、ウミガメの甲羅、魚から採集した寄生虫標本、獣医学の教科書などを展示した。参加者は、小学校中・高学年から中学生とその保護者が主体だった。プログラム終了時の質問では、保護者による獣医学部進学にあたっての勉強、進学先、費用などに関する質問が多く、児童側からの積極的な発言はあまりなかった一方、アンケートでは「獣医師になりたいので楽しかった」「寄生虫や骨の標本が面白かった」などの好感度の高いコメントが多かった。

ウ. イルカを調べてみよう

イルカの飼育環境や実物のイルカを観察することを通してイルカを理解することを目的とした。イルカの形態や生態などのレクチャーでは、パネル、写真、標本を用い、理解しやすくなるように工夫した。また、イルカの生物学的な知識だけではなく、体重や体温測定を実施する理由や方法、餌の選定や管理、トレーニングなど、イルカの飼育についても紹介した。またイルカの骨格標本や生体を間近で観察しながら、体のつくりについて解説をした。プログラム終了後、イルカの知識やイメージについて質問すると、参加前に比べ体のつくりや体色などを正確に答えられる参加者が増え、イルカのイメージについても「近くで観察すると、イメージと少し違った」「印象が変わった」などのコメントが見られた。イルカについての正しい知識を身につけてもらうことができた。

⑩ 大人向け教室 写真教室

水族館の楽しみのひとつとして写真撮影があるが、アクリルガラス越しであることや暗い中での撮影のため、綺麗な写真を撮影することがとても難しい。しかし、これらの難しさはカメラの設定や撮影する際のちょっとした工夫によってある程度改善することができる。それらの「工夫」について、職員がレクチャーすることで水族館での楽しみ方の幅を広げてもらうことができた。

⑪ 田んぼ体験（田植え、稲刈り・稲架掛け、脱穀、稲わら細工）

ラムサール条約湿地自治体認証関連事業として、湿地の1つである田んぼでの田おこし（代掻き）、田植え、草踏み、柵付け、カカシ作り、稲刈り、稲架掛け、脱穀、稲わら工作と稲作の一連の流れを体験し、稲作と田んぼにすむ生物との関係などを知ってもらうことを目的とした。草取りや草踏み、さらに鳥害対策の柵付けや案山子作りなども加えて全8回とし、低年齢のこどもにも作業ができて稲作について学べる内容とした。稲わら細工では、日本の文化を伝え、自分たちで育て収穫した米を炊いておむすびにして食べるなど、食育にもつながる内容とした。生きものと田んぼとの関係なども観察できることから、環境への関心を深めてもらう機会として継続していきたい。

⑫ 野外体験教室

ア. 貝の標本づくり

貝の採集や標本作製の経験を通し、自然環境と野生生物に関心を持ってもらうことを目的に毎年実施している。当館地先海岸に赴き、そこに生息する貝類の観察と採集、標本作製した。海岸の採集では、ただ採集をするだけでなく、貝類の生息場所に違いがあることを紹介し、観察してもらうことで体型や食性など多様性があることを感じてもらうようにした。観察した貝類を自ら標本にしてもらうことで、研究資料としての役割があることを知ってもらった。身近で行える野外体験のプログラムであることから、水生生物への関心を深めてもらう機会として継続したい。

イ. スナガニ観察会

当館の地先海岸の砂浜で、スナガニの観察、採集を中心に、どのような生き物が砂浜を利用しているのか理解、興味を深めることを目的として行った。巣穴構造を理解するために、石膏で型を取るなどの工夫をした。アンケートに「海に行って実際にカニを探す体験がとてもおもしろかった。」とあり、身近な生き物や地域の自然環境に興味を持って接してもらうきっかけを作ることができた。今後も継続していきたい。

ウ. 潟の生きもの観察会 ※ラムサール条約湿地自治体関連事業

令和6年度は悪天候のため中止とした。

上堰潟での「潟の生きもの観察会」は、過去3回実施しているが悪天候による中止は今回が初めてであった。参加予定者からの意見や苦情などはなかった。上堰潟は上堰潟公園内にあり駐車場が隣接し、整備されていて水辺へのアクセスが良いことから、令和7年度も同時期に上堰潟で「潟の生きもの観察会」の実施を予定している。人と自然が共存する里潟は、新潟市が誇る水辺環境であり、その価値と魅力を伝えていきたい。

⑬ 舟に乗って水草刈りと泥上げ体験

人が利用し手を加えることで維持されてきた二次的自然である里潟や水田、ため池などの管理や物質循環について、体験及び専門家による講演を通して学ぶことを目的として実施した。体験は「にいがたフィールド」の砂丘湖で舟に乗り、繁茂した水草の刈り取りや、ため池の水底にある堆積物を掻き揚げ田んぼに追加することを行った。これは潟普請といい、かつて佐潟で行っていた潟環境の維持と活用の方法を模したものである。このような体験を通して現在では親しむことが少なくなった潟の利用や管理を学んでもらった。また「新潟市歴史博物館みなとぴあ」の学芸員、山田祐紀氏による講演「田んぼのどうぶつえんー低湿地・にいがたのくらしー」を併せて実施することで、専門的な知識と先人の生活を知る機会を提供できた。ラムサール湿地自治体として欠かせないプログラムであるため、令和7年度も継続して開催する計画である。

⑭ 動く市政教室「冬のマリンピアツアー」

今年度初めて新潟市市民生活部広聴相談課から依頼を受け、動く市政教室として当館のバックヤードツアーを実施した。参加者の満足度は高かったが、バックヤードの一部には安全性に問題があることから、引き続き実施するためには、内容の見直しを検討する必要がある。

⑮ ミナミイワビペンギン解説

ペンギン海岸観覧席を利用し、普段展示していないミナミイワビペンギンを実際に見てもらい、観察しながら形態や生態について解説した。間近で見ることが出来たことから多くの方が熱心に観察し、質問も多く寄せられた。また、葛西臨海水族園と長崎ペンギン水族館の協力の元、抱卵や育雛の様子を写真でみてもらうことが出来た。4月1日から14日の14回と10月19日から11月9日までの月曜、水曜、土曜の全10回を予定していたが、鳥インフルエンザ対策のため10月は3回のみの開催となった。県内外からたくさんの方がこの解説を見に来てくださるので、今後も継続して行いたい。

⑯ 特別展示「ヤリマンボウ生鮮標本展示、公開解剖」

令和6年度は11月から12月にかけて新潟県沿岸にヤリマンボウの漂着の連絡が相次ぎ、6回調査に出向いた。中でも2回新鮮な状態の個体が入手されたため、冷蔵標本としてアクアラボ前の外通路にて期間限定で展示した。展示期間は12月17～22日と1月11～13日で延べ日数9日間であった。来館者に近くで見たいが直接触れることは衛生面上問題があるため、どちらの個体もラップで包み展示した。多くの来館者が興味深く観察している様子が見られた。2回目の展示終了後、1月15日に公開で解剖と解説を行った。平日にもかかわらず約100人の見学があり、解剖時間は予定よりもかなり超過したが最後までご覧になった方が多かった。中には解剖見学を目的に県外からお越しの来館者も見受けられ、詳しくヤリマンボウについて知る貴重な機会を提供できた。新鮮な状態の生物が漂着することは珍しいため、海の生物を知っていただく良い機会となった。今後もチャンスがあれば行いたいイベントである。

(5) その他のイベントの実施状況について

① 入館者 1,800 万人達成記念セレモニー

平成2年7月の新潟市水族館の開館からの延べ入館者数が4月12日に 1,800 万人に到達した。長きにわたり多くの方にご来館いただいたことへの感謝の意を伝えることを目的に記念セレモニーを開催した。1,800 万人目の入館者となったお客様に認定証と記念品を贈呈した。

② 海のミュージアムサポート海岸清掃

5月6日、6月1日、9月28日、11月4日(※7月15日は落雷警報、10月19日は荒天のため中止)に地先海岸で海岸清掃を行った。清掃の前にパネルで海洋ごみやマイクロプラスチックについてレクチャーし、延べ 728 人が参加した。

③ 令和 7 年オリジナルカレンダープレゼント

毎年恒例のプレゼントとして、11月23日から希望する方先着 1,200 人へオリジナルカレンダーをプレゼントした。

④ クリスマスツリー展示

11月23日から12月28日の間、マリニピアホール(円柱水槽側)に高さ約 4 メートルのクリスマスツリーを展示した。また、展示初日には、点灯式と地域連携の一環として新潟青陵大学アカペラサークルによるクリスマスミニライブを約 30 分行い、約 200 人のお客様が歌とクイズを楽しんだ。

⑤ 門松展示

1月2日から5日まで、当館の敷地内に落ちている松などを使い、手作りで製作した門松を正門入口に設置し、お正月の雰囲気を出した。

⑥ 二十歳のつどいキャンペーン

1月2日から13日の間、「二十歳のつどい」会場で配付したクーポン券チラシや、スマートフォンなどで当館 HP のクーポン券などを提示した二十歳の集い対象者本人及び同行者 1 名を無料で入館いただいた。また、館内レストランの割引クーポン券も併せて配付した。期間中、対象者 156 人とその同行者 135 人が来館した。

⑦ 新潟青陵大学&マリニピア日本海 お正月プチお楽しみ会

1月6日に新潟青陵大学と共催でプチお楽しみ会を開催した。新潟青陵大学社会福祉学科コミュニティビジネスコースの学生 13 人によるアカペラ合唱、当館による展示生物に関するクイズ大会を行い、参加者には海の生き物缶バッジをプレゼントするとともに、「生き物情報」を提供した。参加者は約 100 人と盛況であった。

なお、本事業は新潟青陵学園との包括連携協定によるもので、地域コミュニティ授業の一環として実施した。

⑧ 年間パスポート販売キャンペーン

毎年実施しているキャンペーンで、年間パスポート購入者へ館内ミュージアムショップ・レストランで利用できる割引クーポン(大人 500 円分、小人 200 円分、幼児にはシール)をプレゼントした。期間は 1 月 14 日から 2 月 16 日(当初 2 月 11 日までのところを大雪影響で延長)とし、期間中 2,754 人が購入した。例年、同時期に実施しているため、このキャンペーンに合わせて購入される方も多くみられる。更なる購入を促すため今後も継続していきたい。

⑨ 障がい者向けイベントくちよつと静かな水族館マリンピア日本海サイレントウィーク>

令和 5 年度までは障がい者向けイベントとして実施していたが、今年は障がいの有無にかかわらずに楽しめるインクルーシブな取り組みとして、2 月 25 日から 3 月 3 日の 1 週間、各日の午後に実施した。BGM やマイクを使った解説などの館内の人工的な音をできるだけ少なくして、いつもより静かな水族館で、生き物が出す音や水の音などに耳を澄ませ、じっくりと観察してもらう環境を創出した。来館者へのアンケートからは、障がいのある方以外からも、静かにゆっくり見られてよかった、また実施してほしいなどの意見が寄せられ、概ね好評であった。

⑩ 新潟市ジュニア音楽教室&マリンピア日本海 プチお楽しみ会「マリンコンサート」

3 月 9 日に新潟市ジュニア音楽教室と共催で「マリンコンサート」を開催した。新潟市ジュニア邦楽合奏団、新潟市ジュニアオーケストラ教室、新潟市ジュニア合唱団による海にちなんだ楽曲の演奏と、当館による展示生物に関するクイズ大会を行い、参加者には持ち帰って海の生き物に興味を持ってもらえるように、魚へんメモ帳をプレゼントした。参加者は約 200 人と盛況であった。

(6) 専門的な調査・研究等について

「魚類等の繁殖・育成に関する調査」「鯨類の生理に関する調査」等、飼育水族に関する様々な調査研究を行っている。また、「漂着生物調査」「地域生物調査」等、野生水族に関する調査を行い、地域の自然史に関する知見の蓄積に努めている。

6 月 11 日から 12 日に新潟県出雲崎町石地海岸で採集したサツキハゼは、新潟県内での採集記録はなく、これまで日本海側の北限記録は石川県であった。当館職員の論文投稿により新潟県での初記録並びに北限記録として認められた。

また令和 6 年度はヤリマンボウの漂着が相次ぎ、6 回調査に出向いた中で 2 回は新鮮な個体であった。そのためアクアラボ前通路で 6 日間と 3 日間の合計 9 日間生鮮展示を行った。来館者がとても興味深く観察している様子であった。展示個体を用いた公開解剖も行い、多くの方にマンボウに関する情報を発信した。なかなか生体展示することが難しい種が鮮度の良い状態で漂着した場合、鮮魚として展示に活用するのは 1 つの方法である。自然界には多様な生物が生息しているため、できる限り来館者にさまざまな方法で今後も伝えていきたい。

各種会議や研修会是对面での開催が増え、他園館との最新情報の交換等を通して飼育技術の一層の向上を図った。また、日本動物園水族館協会生物多様性委員会との協力体制を維持し、絶滅の危機に瀕している種の保存に努めるとともに、調査研究を行った。新しい取り組みとしては、令和 6 年度から新しくバイカルアザラシが種の保存事業の一環として計画管理者を置くことになり当館が引き受けた。またペンギンにデータロガーを装着し、行動を分析することで科学的な根拠に基づいたペンギン類のアニマルウェルフェアに配慮した適正な飼育施設基準の作成のための研究に協力した。産卵時期や換羽期ではない時期に、ロガーが外れてしまう個体も多くデータが取れた個体は少なかった。本研究は 3 年計画のため今回の反省を活かし、適正な飼育基準が作成できるよう今後も努めたい。

これらの様々な研究の成果をホームページで公開する等、新潟における水辺の環境・水生生物についての情報の収集・発信基地としての役割を担っている。状況に応じて、特定外来生物が生態系に与える影響や、絶滅が危惧されている希少種についての情報を積極的に発信している。

日本動物園水族館協会主催の会議に関して、第 50 回海獣技術者研究会で「ウミガラス雛へのサプリメント投与」を発表、関東東北・北海道ブロック動物園水族館合同技術者研究会で「高齢かつ両眼を失明したミナミイワトビペンギンの飼育管理」を発表、第 69 回水族館技術者研究会で「スナガニのメガロパ期までの育成記録」と「コンノハゼの保全活動」の2題を発表した。また日本水族館協会主催の会議に関して、第 5 回水族館研究会で「座礁したカマイルカの遊泳不良に対するアプローチ」と「飼育下ウミガラスで見られた親以外の個体による抱雛行動」の2題を発表した。また令和 6 年度は日本動物園水族館両生類爬虫類会議の開催館を当館が務めるとともに、「小型サンショウウオで発生した *Mycobacterium montefiorensense* による非結核性抗酸菌症」を発表した。また、ふくしま海洋科学館のイベント「旅する深海魚～どこで生まれてどこで育つのか～」に招かれ、「のどぐろの生態の謎を解き明かす」の講演を行った。この他に日本野生動物医学学会大会で「プレドニゾロン投与中のカリフォルニアアシカで発症した深部皮膚トリコスポロン症」の発表を行った。

他の研究機関との水生生物に関する研究も積極的に行った。水産庁さけます等栽培対象資源対策事業の一環として、富山県農林水産総合技術センター水産研究所とアカムツに関する研究を行い、アカムツの親魚養成技術の開発を担当し成果を報告した。

他園館との共同調査では、ふくしま海洋科学館と ROV(遠隔操作無人探査機)による佐渡海峡海底の調査を引き続き行い、令和 6 年度は企画展示「ROV で迫る日本海の深海」を開催、また本企画展示に関連し講演会「水族館職員が語る 深海調査と深海生物」と題しふくしま海洋科学館の職員と東海大学海洋科学館の職員を招聘し講演会を行った。

生体入手の困難な種の飼育展示のための調査・研究でも成果を得た。ザラビクニン、ヤマトコブシカジカ、アバチャン、コンペイトウなど日本海を特徴づける魚類の展示種数を増やす努力をし、地域の自然の情報発信に努めた。

生物多様性保全ネットワーク新潟が主催する「親子魚探検隊」に協力し、水生動物相を調べ、在来生態系に悪影響を及ぼす外来生物の生息状況を明らかにした。関川村タランペクラブの「親子で川遊び - 川の生き物観察会 -」および、NPO ネットワーク福島潟の「福島潟いきものしらべ水生動物観察会」に講師として参加し、水生生物について解説した。

今後も、より一層専門的な調査・研究に努め、その成果を還元していきたい。

(7) 総合学習等の受け入れ状況について

文部科学省の提唱に基づく学習支援活動として「総合学習」の受け入れを行っている。質問・インタビューを通して、こどもたちに生き物や環境に関する知識を伝える場となっている。また、職業に対する関心を高めることや、職業・職種の内容や働く意義について考えを深めるキャリア学習の一環としての総合学習にも対応している。

令和 6 年度は、回数(64 回)、参加人数(2,124 人)ともに過去最大数で、学校教育における校外での体験的な学びが重視されてきているためと思われる。

来館した児童・生徒からは、多数の礼状や感想が寄せられた。水族館や水生生物への関心を呼び起こす機会や環境保全について考える機会として、また、社会に目を向け、働くことや学ぶことの意義や大切さを理解していく場として非常に役立っていることから、今後も可能な限り受け入れを行っていきたい。

(8) 実習生等の受け入れ及び講師派遣の状況について

実習生等の受け入れとして、専門学校生を対象に「飼育実習」、大学生を対象に「インターンシップ」「獣医実習」「博物館実習」を行った。これは、博物館類似施設としての一面を持つ水族館として、専門学校生・大学生に実習の場を提供するという社会的貢献の側面はもちろんのことであるが、指導を通じて職員の自己研鑽の場ともなっている。今後も継続して受け入れを行っていききたい。

また、アウトリーチ事業の一環として、様々な「場」への講師派遣を積極的に行った。内容は、大きく分けて「野外での観察等の指導」と「教室(屋内)での生物や仕事についての講義・指導」であるが、対象が小学生から一般と幅広く、また、派遣先のニーズに合わせた内容にする必要があることから、派遣職員の指導者としての専門性が要求される取り組みとなっている。

また今年度初めて、高校で行われている探求プログラムのサポーターとして協力した。生徒たちの探求テーマに沿って、アドバイスや情報提供、館内での活動などを通し 1 年間「環境」を題材に取り組んだ。高校生は与えられる教育から、自ら学ぶことを身につける時期であり、当館がそのような年代の相談役になることも重要な役割であることを改めて認識した。

毎年度継続して実施している新潟大学臨海実習については、海洋フィールドを題材にできる貴重な教育学習機会であることから、今後も継続して指導者を派遣していききたい。

小中学校への講師派遣は、小学校への職業講話が 10 校、中学校への職業講話が 2 校であった。また、市内専門学校で展示・解説実践講座を実施した。今後も、実習生受け入れやアウトリーチ事業を地道にそして積極的に行っていくことが、水族館と地域・社会とのつながりを強固にし、広げていく基礎となると考え、継続していききたい。

(9) 市民ボランティアの活動の状況について

ボランティア活動の目的を大きく「水族館(専門家)と来館者(非専門家)をつなぐ役割」「生涯学習の場」「自己実現の場」の3つとして活動をサポート、コーディネートした。

令和 6 年度は 10 人が新規に登録し、新人研修を 2 回実施したのちに活動に加わってもらった。

活動状況は活動日数 122 日(令和 5 年度=127 日)、活動延べ人数 345 人(令和 5 年度=319 人)と活発な参加が見られた。新型コロナウイルス感染症の影響前のレベルに戻っている。

今後も、水族館・来館者・ボランティアの3者が満足できる活動を推進し、持続的なボランティア活動を目指していききたい。

(10) 広報及び広告宣伝について

令和 6 年度の広報及び広告宣伝について、新型コロナウイルス感染症の影響から脱しつつあることを考慮し、県外への出稿を概ね平常時に戻して実施した。

① テレビ CM とラジオ CM

テレビ CM は、令和 5 度より当館で展示している生物について出題する「マリンピアのいきものじかん」を放映し、解答を館内に掲示して来館を促した。また、県内、山形、福島のテレビ局の CM 付帯パブリシティ枠にて、時期に合わせた PR を多数実施した。TeNY ではタ方の情報番組内で、毎週金曜日に「週刊マリンピア通信」として生物の情報を発信した。毎週末に放映することで週末の行き先の検討に資することを意図した。内容も飼育生物についての旬な情報を放映するように努めた。

ラジオ CM は、BSN ラジオおよび FM 新潟で放送した。それに加えて、夏期は BSN ラジオにて館内からの生中継と、スタッフが生出演しスタジオからリスナーの質問に答えた。

② 雑誌・新聞などの紙媒体への広告

雑誌は、知名度が高い年刊誌(全国誌)及び県内の月刊誌(こどもの遊び場特集)へ継続掲載した。新聞は、山形県・福島県・群馬県の新聞への広告を出稿した。また、令和2年度より実施している、産経新聞 新潟・長野・山梨版で月2回生物コラム連載を継続して実施した。同じく令和3年度から実施しているこども環境新聞エコチル新潟版へ、月1回生物情報の提供も継続して実施した。

③ WEB

オウンドメディアへの展開としては、当館ホームページ、X、Facebook、Instagram などの更新をより頻繁に行うことで、情報の拡散に努めた。また、現場のスタッフによる X アカウントからのタイムリーな生物情報の発信に努めた。

また、有料 WEB 広告として、7 月、8 月、1 月に新潟・山形・福島・群馬・埼玉へ向けて、YouTube、Instagram へ出稿した。

④ プレスリリースなど

プレスリリースは、各イベント・生物情報を積極的に行い、全てのリリースに対して取材の申し入れがあった。ペンギンのタグ交換では、絶滅危惧種の保護活動と生物の多様性を維持する取り組みを、死亡漂着したヤリマンボウの標本展示と公開解剖では、普段ほとんど目にする機会のない生物の実物展示と、解説を交えながらの公開解剖によって、生物の多様性と水族館の調査研究について PR することができた。

⑤ その他

「広告料」を必要としない誘客・宣伝活動も「広報」の一つとして位置づけており、その主なものとしては、幼稚園や保育園、小学校に直接配送するチラシを引き続き実施し、新潟、福島、山形、群馬に配送した。また、全国・地方テレビ番組からの生物に関する質問や写真映像等の借用依頼にも積極的に協力し、番組内で館名をクレジット表示してもらうことにより、館名と専門性の認知度向上に努めた。

(11) 他園館との協力について

ふくしま海洋科学館、魚津水族館、かごしま水族館、加茂水族館、越前松島水族館、足立区生物園、上越市立水族博物館、新潟県立植物園、新潟県立科学博物館と生物交換を実施した。

しながわ水族館、海遊館、下関市立しものせき水族館、札幌市円山動物園、いしかわ動物園、のとじま水族館、飯田市立動物園、よこはま動物園、市原ぞうの国、福山市立動物園、伊勢シーパラダイス、葛西臨海水族園、千葉市動物公園とブリーディングローンを行っている。

葛西臨海水族園のリニューアル工事に伴い、フンボルトペンギン 20 羽、能登半島地震に伴いのとじま水族館からカリフォルニアアシカ1頭を受託飼育し、それぞれ返却した。

東海大学海洋科学博物館の閉館に伴い、一部の展示生物を活魚トラックで出向き引き取った。

人員的な指導に関して、長岡市寺泊水族館が展示しているマゼランペンギンの性判別を目的とした採血指導に当館獣医並びにペンギン飼育経験を有するスタッフを派遣した。うみがたりの職員 3 人にキタノアカヒレタビラの人工授精繁殖技術レクチャーを行った。またアクアトぎふの獣医師(1 人)実習を行った。

ふくしま海洋科学館とは、共同で調査・採集活動を実施したほか、当館市民ボランティアの研修のため 3 月 20 日にボランティア 14 人、職員 4 人が視察を行った。

災害協定を締結している名古屋港水族館、葛西臨海水族園で実施された災害対策訓練を職員が視察した。両園館の先進的な取り組みを参考にし、引き続き当館の災害対策に生かしたい。

(12) リピーター(年間パスポート所持者)への対応について

令和6年度の年間パスポートの購入者は、15,723人(総入館者の2.8%)、パスポート利用者(購入者+リピーター)は89,257人(総入館者の16.0%)となった。また、パスポート利用者の平均入館回数は5.7回であった。

購入者数は過去最高であった令和4年度を若干下回ったが、年間パスポートへの需要は依然として高い。特に例年実施している館内のミュージアムショップ・レストランで利用できるクーポン券を年間パスポート購入者にプレゼントする「年パスキャンペーン」の時期には、令和6年度も多くの方に購入いただいた。

また、令和4年12月から運用を開始したデジタル版年間パスポートについては、年間パスポート購入者15,723人のうち、5,911人、37.5%の方が利用されている。デジタル版への移行によりカード発行枚数が少なく、経費削減に繋がることから、普及率をさらに上げ50%以上となるよう周知を図っていききたい。

年間パスポート保有者へのアンケート調査では、「生き物の展示」について96.6%の人が「非常に満足」「満足」と回答しており、季節感のある展示や特別展示などを行い、いつ来ても新鮮さを感じられたことが評価されたと考えている。「いつも楽しく来させてもらっています」「楽しかった」「この水族館が大好きでよく来ています」などの声のほか、「地震にも負けずに頑張っていて良かったです」などの声もいただいている。また、「次回パスポート購入予定は」との問いに対しては87.5%の人からは「購入したい」と回答してもらうことができた。

生物に関する話題や特別展示などの情報提供を積極的に行い、年間パスポート保有者に繰り返し来館していただき、さらに継続して購入していただくことが入館者増や当館への評価向上に繋がると考えられる。今後も、生物の成長や変化が体感できる展示等を心掛け、リピーターに十分満足してもらえるようにしていきたい。

(13) 新潟市・他団体等との協力

① 学校法人新潟青陵学園との包括的連携協定締結

公益財団法人新潟市海洋河川文化財団として、学校法人新潟青陵学園と包括的連携に関する協定を9月20日に締結した。

包括的連携協定の目的は、教育・研究その他の分野において連携を深め、双方の発展的な教育と研究の推進に向けて互いに協力することにより、地域の発展と人材の育成に寄与することとし、今後も双方の事業に参加しつつ、連携と地域の持続可能な社会づくりに貢献することを目指すこととした。なお、協定書の連携事項は以下のとおりである。

- (ア) 新潟市海洋河川文化財団の運営する新潟市水族館マリニピア日本海と新潟青陵学園の運営する大学、短期大学部、高等学校及び幼稚園が行う事業の相互参加
- (イ) 新潟市海洋河川文化財団による、新潟青陵学園の運営する大学、短期大学部、高等学校及び幼稚園の授業、部活動、クラブ活動等への講師等の派遣及び研修機会の提供
- (ウ) 西海岸公園の環境整備事業
- (エ) 新潟市海洋河川文化財団及び新潟青陵学園の施設・設備の相互利用
- (オ) その他必要と認められる事業

② 県立がんセンター新潟病院 小児病棟へのライブ配信

令和 5 年度に引き続き、県立がんセンター新潟病院小児病棟への配信を 7 月と 3 月の 2 回実施した。がんセンターでは入院中の病児への保育活動をボランティアが実施しているが、その活動時間に合わせ、ZOOM を利用して実施した。入院している患児と保護者は小児病棟のプレイルームの大型テレビや病室で観覧した。約 1 時間で日本海大水槽、日本海固有水槽、ペンギン、ド、イルカショーなどをライブ配信した。令和 7 年度も実施の希望があることから、継続していきたい。

③ 第 7 回ちょ〜生き物発表会

当館もメンバーであるにいがたダイバーシティネットワークを母体としたちょ〜生き物発表会実行委員会に参画し、企画・当日運営の一翼を担った。会場は新潟県立自然科学館で、他にオンライン配信も行った。展示コーナー・体験コーナー・発表会を合わせて参加者は延べ約 1,000 人であった。発表会には、新潟県内で生きもの調査研究をしている NPO 法人や高等学校生物部、博物館などが参加し、9 題の発表があり、当館からは「クジラの仲間の漂着記録〜レアケースを中心に〜」を発表した。発表のほか、「生き物とともに生きる人びと」と題した座談会があり、当館からも、1 人が登壇者として参加した。

体験コーナーは事前募集制を採用し、申込み集計、当選者の決定、各施設への連絡、当日券の配布を担当した。また全体の統括として事務局を引き受け、チラシの作成や配布なども担った。毎年楽しみにしている参加者も多く、また当初の目的である学生の発表の場の創出にも寄与しており、今後も開催に関わっていく意義のある事業である。

④ ジュニア学芸員講座

当館もメンバーであるにいがたダイバーシティネットワークが主催し、新潟県立植物園など市内にある 4 つの施設の協力で 6 回にわたって開催した。対象者は中学生・高校生で、9 人が参加した。5 月 26 日に新潟県立植物園で行われた第 1 回から 12 月 8 日までの全 6 回のプログラムで、当館は 6 月 30 日に実施した第 2 回目の講座を担当した。内容は生息域外保全に取り組んでるシナイモツゴに関して、標識再捕獲法による「にいがたフィールド」の個体数調査とした。トラップにて捕獲、臀鰭を半分切除、放流、再捕獲、捕獲個体数と鰭切除個体数のカウント、計算による総個体数の算出という一連の体験をしてもらった。また絶滅危惧 I A であるシナイモツゴの紹介と全国の水族館と協力した保全の取り組みなどを紹介した。参加者のアンケートでは全員がとても楽しかったと回答しており、その理由にはシナイモツゴの情報、調査方法、体験内容などが挙げられていた。学芸員講座として良いプログラムであったと思われる。講座は来年度も継続予定のため、次回はもう一步踏み込んだ環境教育も体験できるようプログラムをブラッシュアップし、生物に興味を持っている中高生に提供したい。

⑤ 新潟市里潟研究ネットワーク会議への参加

新潟市環境部環境政策課が事務局となっている新潟市里潟研究ネットワーク会議に今年度も引き続き参加した。会議では、ラムサール条約湿地自治体認証に関連した当館の事業についての紹介を行った。また同ネットワークの中核メンバーである、大熊教授と澤口教授にお越しいただき、職員向けに講演いただいた。

⑥ ばんえつ発見の旅サポートイベントへの参加

6月8日、9日に、新潟市のいくとぴあ食花で、アクアマリンふくしまが事務局をつとめ磐越道沿線の公共施設が参加する「ばんえつ発見の旅サポート」のイベントに参加した。公共施設等12団体が出展し、それぞれワークショップなどでPRを行った。2日間で2,262人の集客があった。当館は「海岸の砂からマイクロプラスチック探し」を実施したところ、来場者の切れ目がなく、大変な盛況であった。当館の知名度向上と来館促進に有効と思われる。また、ミュージアブショップによる物販も好評であった。

⑦ 「海を流れるゴミ」ワークショップの開催

6月29日にアピタパワー新潟亀田店イベントスペースで、当館への来館促進と環境問題への啓発を目的にワークショップ開催した。海洋ゴミについて解説し、ヒトの生活が環境に与える影響について考えてもらったのち、新潟の海岸の砂からマイクロプラスチックを探してもらい、それをレジンで固めてアクセサリを作製した。参加者は73人と好評であった。

そのほか、環境問題への啓発として、海洋ゴミについての解説パネル展示、ミズクラゲ水槽とビニール袋水槽の比較展示も行った。

⑧ 「海の月間」パネル展の開催 北陸信越運輸局共催

7月13日から8月12日まで、北陸信越運輸局海事部との共催で、海にひろがる夢・未来「海の月間」パネル展を当館アクアラボで開催した。例年同時期に実施しているもので、解説を通して「船」、「港湾施設」、「海上保安」といった海への一体感を演出し、興味・関心を高めてもらうことを目的とした。

⑨ 海鳥フェスティバル 海ゴミブース出展

7月14日に北海道海鳥センターで開催された海鳥フェスティバルに出展した。当イベントは例年同時期に開催されているもので、当館とともにウミガラスを飼育している葛西臨海水族園も毎年参加していることから、当館もウミガラスの生息地である当地のイベントに参加することとした。

環境問題への啓発として、海岸の砂の中からのマイクロプラスチック探しと海洋ゴミについての解説パネル展示を実施した。70人ほどの参加者があり、小学生の参加が多く、盛況であった。

⑩ キラキラベビーパレード(天寿園)へ出展

乳幼児をもつ親を対象として、知育、習い事、離乳食、生協、古着販売、スキンケア、ハンドメイド教室等で親と子が過ごす時間を充実させるヒントを得てもらうことが目的の営利イベントに出展した。生後1年未満のお子様連れが多く、ご家族への講演感覚のお出かけ先としての提案、知育としての水族館利用、年間パスポートのおすすめなどを中心にPRした。

また、ビーバーとアザラシの毛皮さわり体験、動物の食べ物クイズ、海の生き物缶バッジ釣り、生物情報や割引券チラシの配布を行った。当ブースへは243組506人の来場があり、来館促進だけでなく、教育普及プログラムの開発余地があると感じられた。

⑪ ハマベリング!!!「にいがた氷菓の陣」ブース出展

新潟市中央区主催の日和山浜魅力創出事業「ハマベリング!!!」の一環として9月14日から16日に開催された「にいがた氷菓(アイス)の陣」に「ハマベの教室」として2日間出展した。日和山浜で見られる海洋動物缶バッジ釣りや浜辺の危険生物情報の提供、海洋ゴミのパネル展示により生物や環境保全についての普及啓発、来館促進活動を行った。当ブースへの来場者は2日間で300組800人と盛況であった。

⑫ 青陵大学学園祭(青空祭)ブース出展

10月26日、27日に開催された青陵大学学園祭(青空祭)にミュージアムショップ、レストランの物販を展開した。ミュージアムショップはカワウソくじとタコくじを中心としたグッズを、レストランはチンアナゴチュロスを販売し、両店舗とも完売となる盛況ぶりであった。当館からは、ミュージアムショップのくじにちなんで、カワウソとタコについての解説パネルを展示した。

新潟青陵大学は同じ地域の施設であり、これまでも青空祭への出展を行ってきたが、令和6年度に包括連携協定を締結したことから、今後も様々な分野でさらに連携したいと考えている。

⑬ 第9管区海上保安庁による灯台記念日156周年展示イベントへの協力

10月26日、27日に第9管区海上保安庁による灯台記念日156周年展示イベントを当館アクアラボで開催した。展示パネルなどは海上保安庁が設置した。また、両日とも海上保安庁特別講座「うんこドリルでクイズ大会」をマリニピアホールで開催し、各日50人以上の参加者で賑わった。海洋ゴミ問題のほか、海にまつわる話題から海洋環境、海洋生物についての興味を引き出す良い機会となった。

⑭ にいがた環境フェスティバル2024へ出展

11月17日に新潟県主催「にいがた環境フェスティバル2024」に出展した。長らく万代島多目的広場(大かま)で開催されていたが、令和5年度は朱鷺メッセのホールで、令和6年度は全面改装された新潟駅での開催となった。出展ブースでは、海洋を漂うゴミをメインテーマとし、ミズクラゲと海を漂うビニールの対比を展示、新潟の海で見られる生き物缶バッジ釣り体験を行った。それらに合わせた海洋ゴミや生物への影響などの解説パネルを掲示することで、よりSDGsを意識した展示とした。あいにくの大雨であったが、164組500人の来場者があり、盛況であった。

⑮ アルビレックス新潟ホームゲームへ出展

11月30日のサッカーアルビレックス新潟のホームゲーム(ガンバ大阪戦)の市町村デーに新潟市ブースに出展した。鳥屋野潟公園内ということで、鳥屋野潟で見られる生き物缶バッジ釣り体験を行い、生物についての情報を提供した。また、当館のパンフレットのほか、新潟市文化政策課所管施設のパンフレットも配布し、双方の来館促進に努めた。

⑯ 新潟広域都市圏連携事業「文化・観光施設共通割引券」

新潟広域都市圏連携事業「文化・観光施設利用促進」により、「文化・観光施設共通割引」を実施した。新潟市だけでなく広域都市圏の方も割引料金で入館でき、新潟市では6,302人、新潟市以外では1,186人のお客様が利用された。

⑰ 一般社団法人日本自動車連盟(JAF)会員割引

全国的な自動車ユーザー団体である一般社団法人日本自動車連盟と連携し、会員に対し当館のPRを行い、会員証提示で割引を行った。入館促進が図られ、47,428 人のお客様が利用された。

⑱ 内閣府が実施する「子育て支援パスポート事業」への協賛

内閣府の社会全体で子育て世帯を応援するという趣旨に賛同し、全国共通で展開されている「子育て支援パスポート」事業に協賛し、当該事業の会員に対し割引を行った。35,594 人のお客様が利用された。

(14) 施設・設備について

施設・設備については、大規模な修繕を 4 件実施した。「日本海大水槽天井修繕工事」「イルカろ過機配管修繕工事」「カワウソ水槽観覧通路側壁漏水補修工事」「カワウソ水槽床面防水補修工事」を実施した。このうち日本海大水槽天井とカワウソ水槽については、令和 6 年 1 月に発生した能登半島地震の被害によるものである。その他の施設・設備についても、老朽化などにより突発的な不具合が発生していることから注意深く維持管理を行い、新潟市と協議しながら、早めの対応で事故防止を図りたい。

3. 入館料収入の実績について

令和 6 年度入館料収入 483,151,032 円（対前年度比 103.9%）

入館料の徴収事務については、協定書に基づき適正に実施した。入館者数は 555,093 人、令和 5 年度の 543,257 人から 11,836 人増加、「公の施設目標管理型評価書」の評価指標の 540,000 人を達成した。

入館館料収入も 483,151,032 円で、令和 5 年度の 465,190,538 円から 17,960,494 円と増加し、「公の施設目標管理型評価書」の評価指標 460,637,000 円を達成した。無料の乳幼児を含めた客単価は 870 円となり、令和 4 年度の 844 円、令和 5 年度の 856 円と比較し上昇が続いている。割引や減免の対象ではない普通料金で入館する観光客の増加が要因と考えられる。

入館者・収入の増加対策として、例年同様、学校の夏休みに合わせ、新潟市内の幼稚園・保育園、新潟市外の県内と山形、福島、群馬の小学校へ割引券付チラシ（提示で 1 組全員 2 割引）を配布した。また、12 月には冬場の閑散期対策として例年同様、新潟市内の小学校、幼稚園・保育園に同様の割引券付チラシの配布などを行った。割引券付チラシを利用者は 24,630 人で、令和 5 年度の 16,276 人から大きく増加し、来館の動機付けに非常に効果的であったと考えられる。

全国で共通展開する「子育て支援パスポート事業」では、35,594 人のお客様に来館いただいた。県外からのお客様の利用も多くあり、この割引制度が全体的に周知されていると思われる。

また、平成 25 年のリニューアル後に導入した大手コンビニエンスストアのオンライン端末機で入館チケットが購入できる「コンビニチケット販売」や、同じくリニューアル後に導入した、会員証の窓口提示で 5 人まで 2 割引となる「JAF カード割引」も継続した。

入館料の免除については、新潟市水族館条例・同施行規則に基づき適切に実施しているが、今後も来館する幼稚園・保育園、小学校、高齢者施設、福祉施設など免除対象が増えることが見込まれる。来館当日の窓口対応や、団体休憩室の予約受け入れなど業務の煩雑が予想されるが、状況を把握しながら不備のないよう行い、安心・安全に気持ちよくご利用いただけるよう注意を払っていききたい。

4. 管理経費等の収支決算について

令和 6 年度は様々な物価が高騰した。中でも餌料代の高騰は大きく、約 32,000 千円の支出となり、令和 5 年度と比較すると約 6,000 千円増加、令和 4 年度と比較すると約 8,500 千円増加となった。購入量は変わらない中、年々飼料購入代が増加している。令和 6 年度餌料の予算は 23,771 千円であり、8,000 千円を超える赤字となった。

修繕工事費については、リニューアル工事で未着手だった建物・設備箇所をはじめ、リニューアル工事で更新した建物・設備についても、経年による不具合が生じてきている。その都度修繕工事を行っているが経費が依然として嵩んでいる。令和 6 年度工事予算は、22,000 千円だったが、支出は約 38,000 千円となった。

これらの赤字の補填については、令和 6 年度予算のうち電気料金に余裕があったこと、また委託業務の仕様内容を見直すことや、消耗品の在庫管理による無駄のない発注など、徹底したコスト管理を行い、ほかの費目で支出を抑えた。しかし、それでも指定管理料では賄えず赤字となり、自主財源から補填して収支を合わせた。

餌料経費削減のため従来のイワシから単価の安いサバに変更するなど最大限の努力はしているが、昨今の世界情勢から魚の価格はさらに上がっていくと予想される。さらに安い単価の餌料を探すなど工夫はしていくが、劇的な改善は望めず大きな課題である。

また、工事修繕では、大規模修繕が発生した場合や不具合が予想される場合は、新潟市と協議しながら行っていきたい。

令和 6 年度の人件費については、新潟市が、全国的な賃金上昇を鑑みて指定管理者の賃金向上を後押しするため、人件費支援金として約 1,600 千円の増額補正を行った。その支援もあり賃金上昇に対応することができた。

次期指定管理期間も「最小コストで最適な管理」を目指し、かつ、お客様への快適なサービス提供を図るという基本原則に則り水族館の運営を行っていきたい。

5. 自己評価に関する事項について

「公の施設目標管理型評価書」に記載のとおりである。

6. 最後に

令和 6 年度の入館者数は、555,093 人(対前年度比 102.2%)、入館料収入は、483,151,032 円(対前年度比 103.9%)で、共に令和 5 年度を上回った。全国的に旅行意欲が高まり、当館においても帰省や行楽で県外から来館される方が増えたためと思われる。その結果、「公の施設目標管理型評価書」において令和 6 年度に改められた評価指標である「入館者数 540,000 人、入館料収入 460,637,000 円」を達成することができた。

毎月実施しているお客様アンケートの結果によると、入館者の満足度は、展示生物全般で、「非常に満足」と「満足」の計が 96.4%、イルカショー、解説プログラムをご覧になった方で「非常に満足」と「満足」の計が 96.5%と満足度は依然として高水準を保っている。全体的な感想として「また来たい。楽しかった。」「興味深い展示が多くあり楽しめました。」「イルカショーがとても素晴らしかった。質問タイムはとても満足です。」「見応えがあつて素敵な水族館です。」「ショーや解説を通して様々なことを学びました。」「水槽の見せ方がきれいで魅力的でした。」などの感想が寄せられており、多くのお客様に喜んでいただいている。また、「トイレやベンチがたくさんあってよいです。」「とても丁寧な対応でまた来たいです。」「館内全体が洗練された雰囲気で居心地がよかった。」など展示生物以外でも好意的な声が寄せられている。また、年間パスポート保有者を除くお客様の来館回数に

については、「はじめて」が 38.7%(前年度 28.7%)と令和 5 年度と比較し大きく増加している。県外からのお客様は「はじめて」が全体の 68.3%と最も多く、まだ一度もご来館いただけていない方が潜在的に多いことが伺える。そういった方に訪問先として選んでいただけるよう広報活動に注力したい。一方、新潟市内のお客様は、来館回数 4 回以上が全体の 58.2%と圧倒的に多い。今後も当財団が掲げるビジョン「新潟で一番愛される施設」を目指し、常に新鮮味のある展示を心掛け、何度も足を運んでいただける運営に一層努めていきたい。

当財団は、令和 6 年度からは新たに 5 年間の指定を受け管理運営を再び行うこととなった。物価の高騰が依然として続いている中、安定した水族館運営を行い、法人としても健全な経営ができるよう努めていきたい。今指定管理期間においても新潟市水族館のさらなる魅力づくりを目指し、ビジョンである「新潟で一番愛される施設」となるよう平成 2 年の開館当初から培ってきた豊富な知識と経験を生かし、多くのお客様から喜んでもらえるよう、スタッフが一丸となって頑張っていきたい。